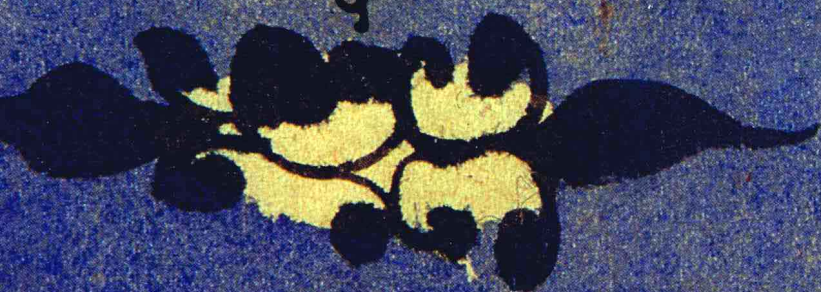


中里恒子
松風はかへりす



松風はかへりす

中里恒子

文藝春秋

松風^{まつかぜ}はかへらず

一九八八年四月十五日 第一刷

一九八八年六月二十日 第二刷

定 價 一 千 圓

著 者 中里恒子^{なかざとつねこ} (著作權繼承者 スクリプナー圭)

發行者 西永達夫

發行所 株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三―二三 郵便番號二〇二

電話東京(〇三)二六五局一二二一

印刷 精興社 製本 中島製本

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

© Kei Scribner 1988

Printed in Japan

ISBN4-16-310230-2

目次

梨園 5

松風はかへらず 37

放生 79

石段 117

伊勢物語の旅 東下りの段より

題字 著者

裝畫 芹澤銑介

松風はかへらず

梨

園

芝居の樂屋といふところは、むやみに素人の觀客がゆくものではないと、わかつてゐても、ちよつと覗いてみたい興味はある。俗に、樂屋裏まで知られてはなどと、世間一般の暮し向きにも言ふくらゐで、つまり、プライバシーに關はる。

けれども役者といふ職業の場合は、ひとに見られる、見せる、見て貰ふといふことが根底にあつて、樂屋も、門戸を閉ぢてはゐない。のれん一つくぐれば、自由自在に出入りが出来る。いづれも、關係者、御最員のれんをくぐるのであつて、むやみに亂入は出来ない。

舞臺裏の樂屋廊下を歩くと、ずらりと役者衆の名がかかげてある。あさぎ色ののれん、

茶いろ、ひはいろさまざまだが、やはり特殊の雰圍氣である。

わたしは、海老藏さんの樂屋以外、のれんをくぐつたことはない。もちろん舞臺を見物するのが主眼であつて、その月出演の役者衆はいづれも記憶してをり、關心があつても、ただの見物人である以上、あちらこちらの樂屋へはひるのは無躰と思へるので、さういふことはしないでだけである。

樂屋の入口には、付人がふたりぐらゐ控へてゐて、中へ通る人を注意してゐる。番頭さんの案内でゆく以外には、單獨ではゆかない。素人の稽古ごとでも、知人友人の會に招かれたときは、樂屋見舞といふことはするが、これも長居はしない。伺ひました、拜見しました、結構でございましたといふだけで引き下る。樂屋で、ながなが話し込むのは、芝居の關係筋であつて、素人は、幕あひに顔を出して、「よい出來でした、」すこしは、感じた缺點を指摘したりして、應援するのが關の山である。

出しものは忘れたが、海老藏さんの樂屋へ友達とはひつた時、顔を落して、浴衣の上にガウンを着てゐた海老藏の膝がしらの横に、トランプの札が、二、三枚のぞいてゐた。「トランプあそびをしてゐたのだな、」

とすぐ、わたしは氣づいた。海老藏襲名まもなくの頃で、當代の人氣ものが、樂屋でトランプ……いい光景に思つた。しかもいそいで、膝の下へかくしたが、二、三枚はみ出てゐたといふのが、人柄をおもはせる。この事をひとに話した。

「役者さんに花札なら、なんとも思はない、トランプでも、ブリッヂや、ポーカーや、賭をするものもありますよ、でも、ひとり遊びといふのは、無意識にしても、内面的だわ、」

「……海老藏さんには、さういふ孤獨なところがあるのでせう、」

わたしは、違ふ違ふと言つた。實はわたしも、机邊に、いつもトランプを二組おいてある。ちよつと氣分の轉換や、約束の用件のひとの來るまでの間とか、ほかに使ひやうのない時間を過すのに、まことに都合がよいのである。そしてまた、トランプのひとりで遊びといふものは、決して孤獨な遊びではなくて、むしろ、ひとりで遊べるといふことは、豊かな想像力の下の自由と、偶然のおもしろさがある。ほんとに孤獨で淋しいとき、トランプなどが、なんの慰めにならう。海老藏さんも、充實した日日があつて、たまたま樂屋で、無心にトランプを並べ、心を開いてゐたのであらう。また、碁も、ひとりで

思考出来る遊びである。海老藏は基もやるさうで、時折碁の話もきいた。

海老藏を襲名したのは、昭和四十四年の十一月興行からで、新之助は、小學五年五月からである。市川宗家の團十郎襲名までの海老さま時代は、十六年になる。

親の名跡を繼ぐといふことは、いづれの商賣にもあるが、歌舞伎の世界では、親の名を繼ぎ傳へる、襲名といふ關門が、次次とある。この場合は、名跡にふさはしい力と、チャンスといふか、周圍の納得と、本人の精進が一致したときが、その檜舞臺となるのであらう。

市川宗家といふ重さは、海老藏の宿命であつて、無心のうちにも、いつかその厳しい重荷を負はねばならないことは、自覺してゐたに相違ない。だが、素直な、臭味のない青年であつた。少しもすれたところのない強直さは、いつか役立つものと、わたしは陰乍ら期待してゐる。

先代の團十郎さんも、まじめな家庭的な人柄であつたらしい。前田青邨畫伯が、團十郎最良であつたことは知られてゐるが、結婚の媒酌もしてをられる。團十郎の若死を悼んで、歿後は、前田夫妻が後見となられたが、海老藏襲名の翌年、昭和四十五年に、母

上も亡くなられて、海老藏は、妹ひとりの淋しい家庭になつた。以後は、前田夫妻が、親代りとなつて、海老藏の親身の相談相手になつてをられ、青邨亡きあと、未亡人も高齢になつたので、團十郎襲名が具體化したのは當然である。

わたしも、先代の襲名にも二度會ひ、當代の團十郎襲名にも、再び舞臺で接しられようかと、來年の春を待つ、觀客のひとりである。

歌舞伎十八番のうち、市川宗家の襲名の折のお家藝としては、勸進帳、助六ゆかりの江戸櫻、鳴神、毛拔、暫、などが必ず出る。

中でも極め付は、助六であらう。ほかの劇團で「助六」を演ずるとき、この「由縁江戸櫻」の題名は、絶対に使へない。市川家だけの演題なのである。ほかの題名で、「助六」を出す。かういふ家柄のきまりは、初代以來のものの由にて、仲仲面倒なしきたりがあるのが、歌舞伎の一つの傳統なのである。

海老藏さんから、直接、この題名の話はきいた。

「助六はやります、ほかでも、けれど、由縁の江戸櫻の題名は、うちだけでございす、」

なんと言つても、はなやかな前彈があつて、唄と合方があつて、ずらりと廓の女郎衆が並んでゐるところへ、かんべら門兵衛と朝顔仙平のやりとりがあつて、花道から、紫の鉢巻をして、黒に朱の襲^{かま}ねの衣裳、きいろい足袋をはいた助六が、傘さして……の唄とともに、たつたつと出て来る。いい姿である。みんな花道に眼を奪はれる。

先代は、江戸前の威勢のいい役者振りであつた。海老藏も、舞臺に出てくると、花のある、美丈夫である。誰が演じて、助六といふ役はひき立つ。舞臺の趣きは、今更言ふまでもないことだが、この間に、助六の、早口の長ぜりふがある。これは覺えるのに苦勞したと、海老藏が言つた。

日頃、どうも輕くちでない、重くち氣味の海老藏には、このべら言ふ啖呵の早口は、のみこむのに骨が折れたであらう。わたしも、早口が終つたときは、ほつとした、齒切のよさと、抑揚がきかせどこなのだから。

芝居の興行は、だいたい二十六、七日續くのであるから、毎日、べらべらやつてゐれば、上達するのは當然である。役者の藝のうまさは、どんな役でも、所作ごとでも、毎日つづけてやるところにあるやうな氣がする。

毎日の舞臺が初日であり、その場の勝負であるから、たしかに、その日その日の出来、不出来があつても不思議はないが、それでもまづければ、すぐ批評が出る。

「わたしも思ふときがあります、」

ものを書く仕事でも、いくら氣を張つたとしても、いつもいつも、思ひ通りにといふわけにはゆかない。ある時は考へつめた揚句、押し通して最後に、尙も一押しするといふやうなもので、役者も、集中することは、一發だと思ふ。一度や二度で、どうのかうのと言はれることは、不死身でない人間には、残念なことなのです。しかし、やるだけのことはやる、持續する、といふ氣力をみとめるのが、眞實の心といふものであらう。

内内のことは知らない、言はない、きかない、言ひわけのきく世界でないことを、みんな承知でやつてゐることを、わたしも、經驗として覺えがある。

さういふとき、言はず語らずとも、察してもらへる部分があるとすれば、それだけで、充分にありがたいことなのである。そのやうな内面の情感が表現されれば、見物は、それに打たれるであらう。藝といふもののうまさ、外観だけでは決してない。内面が滲み出てはじめて、うまくなつた、迫力が出た、哀れがしみじみする、といふことになる

のかもしれない。

修業を積んでも、達者になることだけでは駄目で、役の上に、役者の人柄といふか、格調といふか、飄逸といふか、まあそんなやうなものが、兩兩作用してきて、その人間性がものを言ふゆとりが、現はれるのを待つ……辛抱する、などと言つても、いつのことかわからないのである。

それが、或るとき、世評でもとたんに、

「この頃、急にうまくなつた、うまい役者になつた、顔までよくなりましたね、」

と、言はれたりする。本人だつてわからないであらう。神さま、佛さま、信心のおかげと思ふこともそれぞれ。ほんとに、人間といふものには、さういふ變化をする、不思議な力が潜在してゐるのである。

「海老藏さん、襲名披露と言へば、百日興行でせう、やつぱり體力も大事よ、」

「はい、時間があれば、ゴルフもやります、」

「お稽古は、今でもやるのでせう、」

「はい、この頃常磐津ときはずもやつてをります、聲の鍛練にもなりますし、おもしろくて、」